

吉 良 城 跡 I

1985.3

高知県吾川郡春野町教育委員会



序

高知県のほぼ中央を流れる仁淀川は、高東、吾南の沃野を二分し、豊かな流れとなって太平洋にそそいでいる。その東側に位置する春野町は、高知市にわたる平野とそしてそこ、ここに点在する森の数々で多彩な景観を呈し、春野町の名にふさわしい美しく情緒豊かな郷土である。

この海あり川あり丘ありの地勢こそ、古代先人が住みつく絶好の場所であったにちがいない。その証拠として、昭和48年10月から昭和55年7月にかけて5次にわたって行なった山根遺跡発掘調査では、縄文土器、弥生土器などの遺物をはじめ、石器類など数多くが出土しており春野の歴史が3,000年前からはじまることが確認され、弥生前期の人々の居住地跡や春野町での稻作の始まりも実証されている。更に昭和50年8月より馬場末遺跡では多くの土師器等出土し、それらの土器が馬場末式土器と呼称されるタイプサイトともなった。

こうした古代からの歴史も、他の類にもれず永い年代を経、わが国中世の16世紀半ばにはこの春野町も群雄割拠はなやかな時代となる。現に判明している古城跡でも吉良城、内谷城、芳原城をはじめ14ヶ所存在する。こうした数々の城跡も時代の波に押され、その多くが開発工事等のため記録保存のみにとどまっている。しかし幸いなことにこの状勢の中に於てもこの吉良城跡だけは土佐戦国七雄の一人吉良氏の居城跡として開発の波を被ることなく、美しく町のシンボル的山嶺としてそびえている。

春野町教育委員会としては、早くからこの吉良城跡の価値と重要性を認め、昭和35年に町指定の史跡とし、町の文化財を保護愛好する各団体により史跡公園としての整備に着手して来た。

そうしたこともあり、このたび国・県の温かい補助金を仰ぎこの吉良城跡の発掘に着手した次第である。従って今回は勿論、今後もあくまでこれは学術調査であり、史跡保存の資料を得るためにの調査であることは申すまでもない。今までこうした調査による遺構の確認はなく、具体的な保存管理の方針も立たぬままであったものが、今回の発掘調査結果による明るい展望が生れ、出来ることなら城麓の吉良氏土居屋敷跡についても同様目的のもとに更に調査を進める計画も進めている。

終りに、この報告書作成に至るまでの発掘調査全般にわたる適切なご助言ご指導下さいました岡本健児先生・宅間一之先生、並びに高知県文化振興課の皆様方に深く感謝とお礼を申し上げ序といたします。

春野町教育委員会 川 崩 芳 喜

例　　言

1. 本書は春野町教育委員会が、国・県の補助を受けて昭和59年度に実施した吉良城跡発掘調査の概要報告である。
2. 調査は、高知女子大学岡本健児教授の指導をうけ、高知県教育委員会文化振興課宅間一之社会教育主事が担当した。
3. 本書の作成にあたっては、岡本健児教授の御指導をうけ、松田直則氏の御助言も得た。
4. 本書の編集は宅間一之があたり、執筆は宅間一之・出原恵三があたった。
5. 周辺実測にあたっては春野町産業経済課の協力を得、また造構実測にあたっては、松村博信・中島恒次郎・高橋慎一君（高知大学考古学研究会）の協力も得た。
6. 調査及び整理にあたり援助いただいた多くの方々には深甚の謝意を表したい。

（発掘調査体制）

団長　徳平博道（教育次長）
副団長　国沢和男（社会教育課長）
顧問　岡本健児（高知女子大学教授）
総務　可知文恵（社会教育係長）
藤原　豊（社会教育係主事）
調査員　宅間一之（高知県教育委員会文化振興課）
出原　恵三（　　）

本文目次

序

例　　言

I 調査にいたる経緯	1
II 城跡の概要	3
III 調査の方法と経過	7
IV 調査の概要	8
1 検出遺構	8
(1) 第1調査区の自然石群	8
(2) 第4調査区の石群	8
(3) 5TRの石群	8
(4) 周囲にめぐる石積	8
(5) 柱穴状ピット	13
2 詰周辺部の現状遺構	21
(1) 詰南端部の台状遺構	21
(2) 堀　　切	21
3 出土遺物	22
(1) 土師質土器	22
(2) 青　　磁	22
(3) 白　　磁	23
(4) 青　白　磁	23
(5) 染　付	23
(6) 濑 戸 天 目	24
(7) 備　　前	24
V ま　　と　　め	25

挿 図 目 次

図 1 吉良城跡と周辺の城跡	2
図 2 城跡と土居周辺の地形図	4
図 3 調査区全図	9
図 4 諸平面図	10~11
図 5 造構実測図	14~15
図 6 積堀周辺断面図	16~17
図 7 諸周辺地形断面図	18
図 8 造物実測図	30
図 9 吉良城跡周辺小字図	

図版目次

- | | |
|--|--|
| PL. 1 仁淀川より城跡をみる
仁淀川堤防上より城跡をみる | PL.14 A 5 グリット上面
A 5 グリット石積状況 |
| PL. 2 御殿（南学発祥地）より城跡をみる
森山より城跡をみる | PL.15 F 5 グリット石積
F10、F11 グリット石積 |
| PL. 3 南嶺よりみる春野平野
南嶺南端平坦部 | PL.16 1 TR 全景（北より）
1 TR 全景（南より） |
| PL. 4 詰 発掘前の状況
詰 発掘前の状況 | PL.17 2 TR 全景（北より）
3 TR 全景（東より） |
| PL. 5 詰 草刈り風景
詰 草刈り風景 | PL.18 第1調査区ピット検出状況（西より）
第1調査区ピット検出状況（東より） |
| PL. 6 詰（北より）
詰（南より） | PL.19 第2調査区ピット検出状況（北より）
第2調査区ピット検出状況（南より） |
| PL. 7 第1調査区礎石状石群（北より）
第1調査区礎石状石群（南より） | PL.20 第2調査区ピット検出状況（南より）
第4調査区ピット検出状況（北より） |
| PL. 8 第4調査区石群（北より）
第4調査区5TR全景（北より） | PL.21 第1調査区完掘状況（南より）
第1調査区完掘状況（西より） |
| PL. 9 第4調査区5TR全景（東より）
第4調査区5TR全景近景 | PL.22 第1調査区完掘状況（南より）
第2調査区完掘状況（南より） |
| PL.10 5TR全景（北より）
5TR近景（北より） | PL.23 第2調査区完掘状況（北より）
第2調査区完掘状況（南より） |
| PL.11 4TR石積（上面）
4TR石積（詰側） | PL.24 第3調査区完掘（北より）
第3調査区完掘（東より） |
| PL.12 4TR石積（南より）
4TR石積（北より） | PL.25 遺出土状況 |
| PL.13 A 5 グリット石積（南より）
A 5 グリット石積（北より） | PL.26 出土遺物 |

I 調査にいたる経緯

吉良城跡は、高知県吾川郡春野町弘岡上古城4360に所在する、国土地理院発行の5万分の1地形図によれば、「伊野」の北西隅から52.5cm、南西隅から39.4cmの部分である。

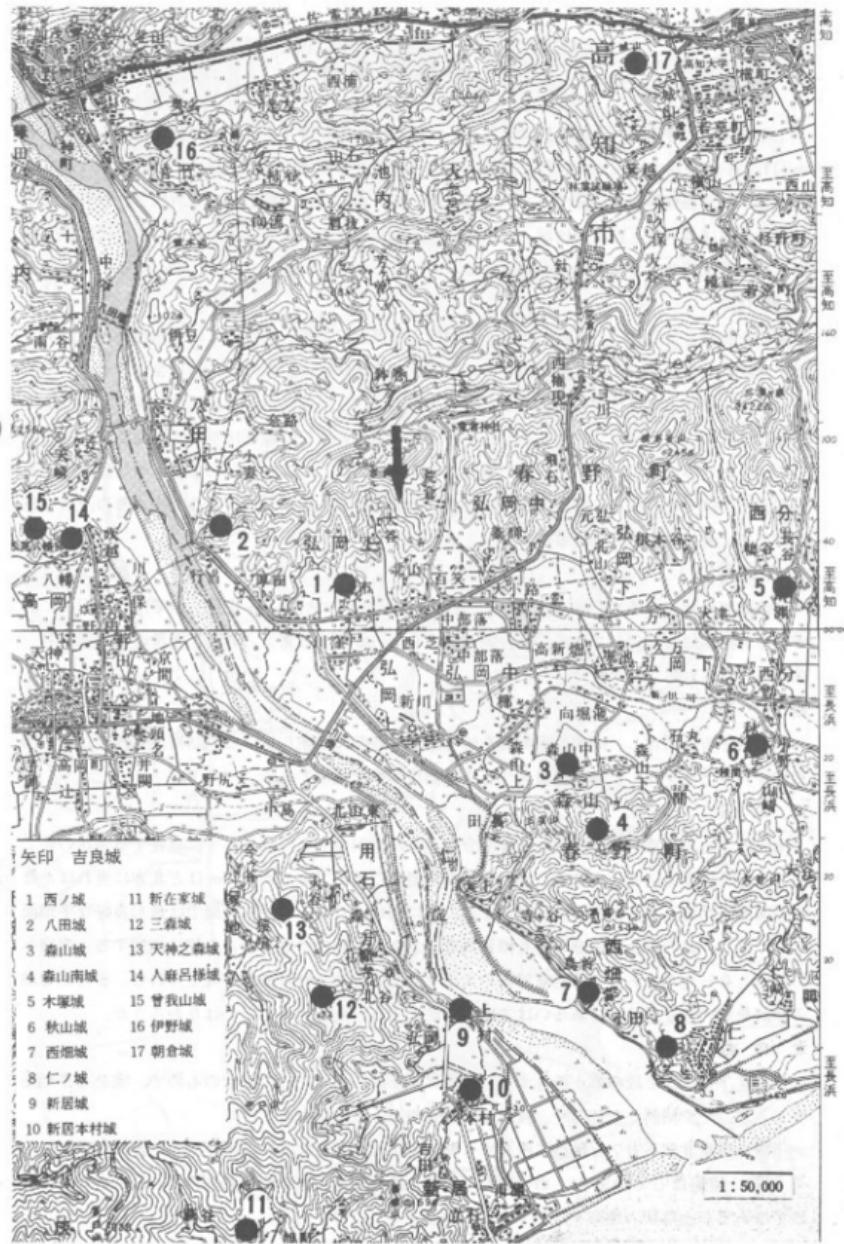
本城跡は土佐戦国の七守護の一人吉良氏居城の地として、城主も明確であり、また吉良宣経は周防から南村梅軒を招き土佐南字発祥の名君として著名な人物である。城跡においても、長宗我部氏の岡豊城、本山氏の朝倉城、大平氏の蓮池城、津野氏の姫野々城、一条氏の中村城などとともに土佐戦国の名城としても知られている。

城跡の所在する弘岡上地区においては、北嶺・南嶺に代表される城山や、その城下に所在する土居屋敷跡を中心に吉良氏の研究や城跡の保存には厚い熱意を示してきた。昭和40年に、地元出身の小島祐馬博士（京都大学名誉教授、日本学士院会員）は『長宗我部地検帳』をもとに土居屋敷と周辺の調査・研究を行いその復原を試み、成果は同じく当地区出身の山本茂一郎画伯によって描かれて大谷部落、土居屋敷入口に掲げられ長くここを訪れる人々を感動させてきた。現在も地元の人々によって補修され同所に建っている。

春野町教育委員会においても早くから吉良城跡の価値と重要性は認識し、昭和35年に町指定の史跡とし、昭和52年には地元や町文化財保護審議会委員・青年団らとともに吉良城跡歴史公園構想をたて、町民のいこいの広場とともに「文化財を愛し歴史に親もう」をスローガンに城跡の整備をはかった。城跡の一部公有地化もはかられ、登山道の整備や南北両嶺の雑木雑草の伐採除草作業が行なわれ吉良城跡は広く町民の中に浸透していった。以来毎年1回南北両嶺の伐採除草作業は、大谷地区民・文化財保護審議会委員・文化財友の会会員の手によって続けられている。

中世城跡は春野町には14ヵ所存在する。このなかで芳原城跡は圃場整備事業によって壠状地形部分が県の手によって緊急発掘された。また木塚城も県道改良工事で一部破壊が予想されてきた。県下的にも岡豊城跡や中村城跡はすでに各種土木工事によって一部記録保存の処置が講ぜられている。この状勢のなかにあって吉良城跡は前述のような経過をへて保存されてきたが、これが抜本的な保存対策にはならず「土佐の一条谷」とは言わながらも発掘調査による遺構の確認は全くなく、具体的な保存管理の方針もないままである。この現実に立脚して春野町教育委員会では、国・県の補助をうけて、山城と土居屋敷及びその周辺も含む可能な範囲の調査を実施し、その遺構を確認しより適切な保存管理の対策を立案することとした。財政的な事情や、個人所有の土地が大部分であることなどから、短期間の大規模な調査は不可能であり、許される範囲内で着実な調査を経続することとした。

調査は高知県教育委員会の協力を得て、昭和59年11月19日から開始された。標高111.2mの北嶺への発掘機材の運搬や、雑木の切株除去作業は、吉良峯山頂より吹きおろす寒風もむしろこころよい秋風の思いすらした。検出遺構の埋め戻し作業も終り、調査が完了したのは師走12月22日であった。



II 城跡の概要

土佐戦国の7守護の一人吉良氏にふさわしい城及び城館が存在する。城は標高111.2mの北嶺と111.5mの南嶺とからなり、特に北嶺を中心に堀切りや堅堀の遺構が良好に残存する。また南嶺南端からは春野平野が一望でき、西の城・森山城・森山南城・秋山城・光清城など春野の城はもちろん東は浦戸城、西は新居城・蓮池城なども望むことができる。西山麓には吉良氏邸跡や堀跡はじめ重臣屋敷や寺院址なども残存する。

北嶺(詰)

南北を長軸として40cm、東西は20cmの楕円状の平坦面である。南端部には台状地形が所在するが土壘状のものはない。現在登山口となっている部分をはじめ、詰の周りには全体にわたって小割石による石積みで自然地形を成形し平坦面を作っている。現登山口の南部分を除いて他は全て急峻な地形によって浮上した地形を呈している。平坦部各所には礎石状割石が散在している部分もあり、あるいは礎石の一部が後世の耕地化の際に移動したものかも知れない。平坦面は中央部分が高く、四方にやや下っているが、特に東中央部分は最も傾斜角度があり、雨水等の流れを感じさせる。現状は雜木林である。

台状地形

詰南端部に詰との比高1.8mの小規模な台状地形がある。詰側8.5mを径として南に半円状に広がり下方南の段に傾斜している。烽台的な機能をもった遺構と考えられる。後世の破壊部分も一部にみうけられる。

南の段

詰の南下方に所在し、南端の南堀切を隔て南嶺の各部に接続している。詰側部東西幅13m、南北17mの長方形を呈し、南北両嶺をつなぐ陸橋状の平坦地形である。

東の段

南の段から現在詰への登山道となる部分から詰の東斜面をとり巻くように存在する帶状の郭である。詰南隅下方においては狭く、かつやや傾斜した地形であるが、11mほど北方に至ればかなり顕著な平坦面となり幅も4mほどになる。特に南端より18m～29m区間では最も良好な平坦面として残り、詰の中央東部分の最も傾斜角度の急な地点のやや北方でこの郭は消滅する。南嶺への通路となったか、あるいは詰東斜面の犬走り的な郭であった可能性が考えられる。また北方詰の傾斜角度の急な部分が、あるいはこの城の虎口であったと考えてよくはなかろうか。

北の段

詰東北下方には2段の郭が存在する。上段は幅4m、長さ15mの帶状のもので、完全な平坦面を示さず、やや傾斜した部分や、後世の攪乱地点もみうけられる。

下段は詰東北部下方7m地点に所在する郭で、13mほど東北方向にはり出した舌状郭である。やや東に傾斜はしているが、おおむね平坦で、特に西端のはり出し部分には8mにわたって僅かではあるが土壘状の地形を残している。両段ともに竹林である。

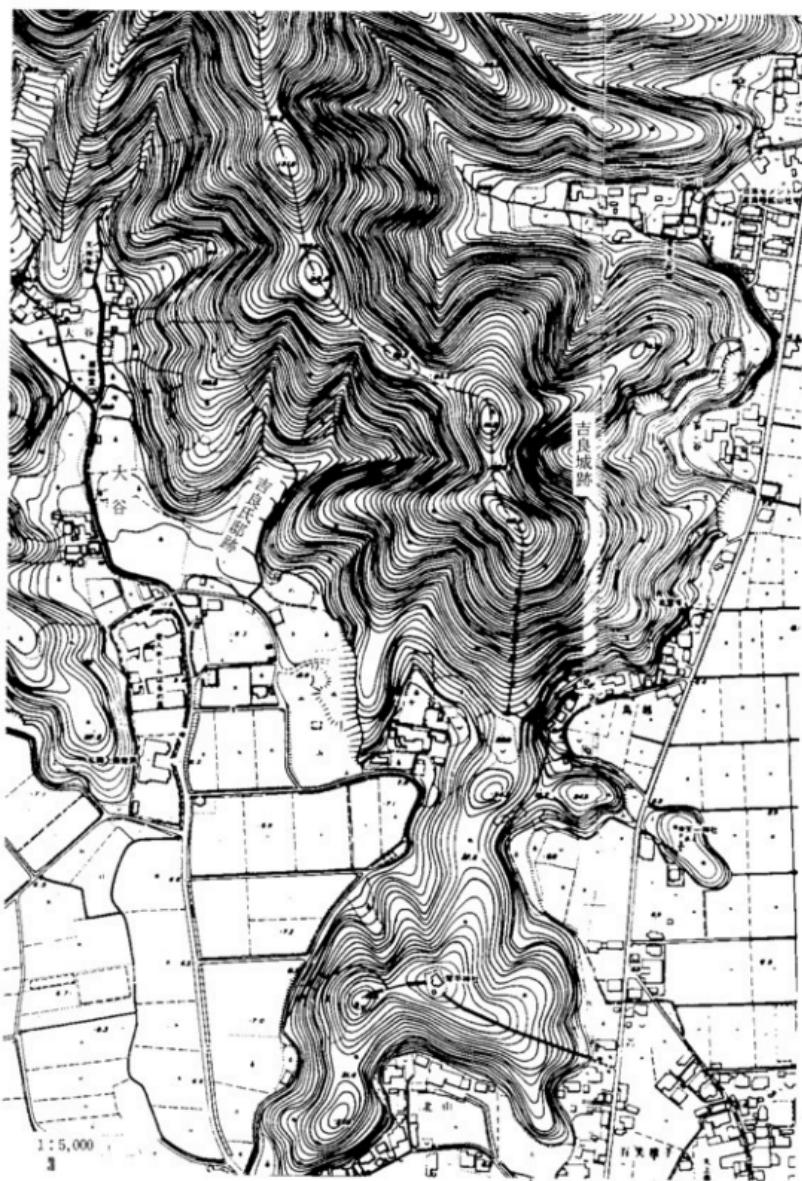


図2 城跡と土居周辺地形図

北堀切及び豎堀

北の段上段の下に1条、詰西北隅下方に4条の堀切と歓型状地形が所在する。北の段下方の堀切は、詰北東部から北東方向にのびる尾根を堀切ったもので上幅7.5m、底幅2m、深さ2m、の規模で、そこより北14m下方では、上幅7.5m、下幅1.5m、深さ3mとさらに大規模化している。この堀切はこの尾根をまたいでそれぞれ両方の谷を利した豎堀となって下方にさきにのびている。

詰西北隅下方の4条の堀切は、ここから吉良峯に通じる尾根を堀切ったものであり、堀切が最も顯著な形で残存する。詰直下の第1堀切は、東斜面では大規模な豎堀となり他の三条の堀切や北の段下方の堀切延長の豎堀と合して下方にのびている。一方西方は、詰西斜面に所在する性格不明の段状地形によって消滅している。

ここより蒲鉾状の地形を隔てた第2堀切は、頂部を中心に両側に25mの堀切となり、東端は大石によって阻まれて絶壁で止まっている。西端は第1堀切と同様西斜面の小規模段状地形によつて止まっている。

第3堀切は、第2堀切の北にあり、両堀間は蒲鉾状の地形で堀切は22mにわたって堀切られている。東端には岩肌が露呈し絶壁となっており、両端は第1・第2堀切同様の地形である。

第4堀切は、第3堀切の北方9mの地点であり、両堀切間は蒲鉾状地形でこの堀切は大きく東西に豎堀状となってのび東斜面では第1堀切及び北の段下方の堀切と合して谷へ下っている。また西斜面においては中小の段状地形に接しながらほどんど麓まで豎堀状の窪地となって下っている。

なお北の段下方の豎堀部分と、第1堀切の間にも2条ほどの小規模な歓型地形の残丘もみうけられる。

東堀切及び豎堀

東の段下方から東方にのびる尾根上に2条の堀切部分と豎堀が所在する。上方堀切部は東の段下方10m地点で、南堀切からは28mの北方である。尾根の堀切部分は上幅5.5m、底幅2.5m、深さ1.5mで、南北に9m続き、そこから自然の谷を利して南北両谷に豎堀となって降っている。

またこより15m下方にも同様堀切が所在する。上幅4m、底幅1.5m、深さ80cmで尾根をまたいで南下方に10m、北下方に20m顯著な窪地状地形となっている。これらの堀切の他に豎堀の窪地も大小数条にわたって存在する。比較的急傾斜の東斜面ではあるが、2~3条の歓型障壁よつてより峻険な地形として成形している。

段 状 地 形

詰下方の西斜面に所在する無数の段状地形である。詰北西下方の第1・第2堀切とほぼ同じレベルからほんと下方の土居直上まで至っている。相当な急傾斜の面に大は200m、小は1m程度の段状地形が相当数成形されている。それらの各段のレベル差は30cm~1mとまちまちであり小割石の石垣部分もあれば、そのままの土肌が露呈している部分もある。この地形は南嶺から西にのびる尾根の北斜面には全く存在せず、南堀切から接続する谷間をはさんで詰北西部の南西方向に面した斜面のみに集中している。また南堀切下方の谷間には6ヵ所にわたって石垣による流

土防止の堰状構造物も存在する。この谷間をはさんで南には岩肌が各所に露呈した急傾斜面があり、北には無数の大小規模の段状地形が存在する異様な地形である。急傾斜による山土の流失防止のための段状地形か、あるいは軍略的効果を目指した地形かその機能や性格については不明である。

南堀切

南北両嶺をつなぐ北嶺南の段と南嶺北の段を堀切るものであり、上幅5m、底幅2m、深さ3.5mの箱堀りで、堀切部分長は12mにわたる造構である。孟宗竹が生えてはいるが造構としては良好な残りである。

南嶺

標高111.5mと北嶺よりわずかに高い。南北を長軸として46m、東西は6~9mと狭い長楕円状の平坦部である。南端は展望よく、出丸としては最高の場所である。北端部には戦争中に掘られた径5m、深さ3mほどの大穴がある。そこから西には3段の舌状郭があり、北にも2段の郭がある。

南嶺北の段

南嶺北端部下方に所在する2段の郭で、上段は南嶺裾部で12m、はり出し延長は10mである。その先端部下方には人頭大の石を使った石垣も若干みえる。

下段は上段との比高3mで、東西16.5m、南北15mの方形の郭であり、北端部には南堀切がある。北嶺南の段とともに南北両嶺をつなぐ陸橋状の平坦地形である。

南嶺西の段

南嶺西下方で西にのびる尾根上に所在する3段の舌状郭で、最上段は南嶺との比高は7~8m、裾部幅12m、はり出し6m、中段は上段の下方3mで裾部幅が15m、はり出しは10m、下段は中段との比高3mで裾部幅12.5m、はり出しは10mの規模である。

堀切及び豊堀状地形（歛型阻障）

西の段最下段より7m下方の地点で、西方にのびる尾根を堀切った造構である。尾根をまたいで北に2条、南に3条にわって堀られたもので、北Ⅰ豊堀は現状では計測不能なわずかな窪地が下方に降っている。北Ⅱ豊堀は延長12mは明確に測定できるもので、上幅6m、底幅80cm~1m、深さ1mのもので現在城山への登山道として利用されている。ここより尾根をまたいで3mの間隔をおいて南Ⅰ豊堀がある。上幅4m、底幅1m、深さ1mのもので下方に27mまで計測ができる。南Ⅱ豊堀は南Ⅰ豊堀と4m間隔で、上幅3m、底幅1m、深さ1mで下方へは20mまで計測できる。またこのⅠ・Ⅱ間に小規模な窪地もあるが、それがいかなるものかの判断はできない。南Ⅲ豊堀から5m間隔で南Ⅳ豊堀が所在する。上幅3m、深さ50~70cmで底は半円状で5~6mまでは実測できる。その東端には豊堀に沿って小規模な蒲鉾状の壘状地形も降っている。

土居

城の西麓の谷に所在する。谷は南面してその入口幅は東西100m前後である。ここで谷は東西2谷に分岐し、東谷は幅40~50mで100mほど入っている。この部分が吉良氏邸跡と伝えられる

場所である。堀や石垣のほか数段の平坦な広い屋敷跡が残存する。現状は前部が竹藪で後部は柿園となっている。一方西谷は幅100mで300m入りこむ。この谷は中央部に流れる小川で更に東西に仕切られるが、重臣屋敷跡、光蓮寺跡、威徳院跡、寺院などの存在が『長宗我部地検帳』によっても知ることができる。現状地形にも土星状地形や屋敷の存在を示すような石垣も各所にみうけられる。発掘調査による確認が必要な土居である。

III 調査の方法と経過

標高111.2mの山頂の詰は、雑草と雜木の生える平坦部であり、作業はその雜木の伐採と雑草の除去から開始した。

調査は、磁北に対し4mグリットを設定し、東西にA~E、南北に1~12の名称を付した。発掘は腐葉土部分から地山層まですべての人力で実施した。

詰平坦部に茂る雜木・雑草の伐採除草作業中にC4及びB4グリット周辺に地上に露出した自然石があり、この自然石の性格確認調査から開始し、続いてC11及びD11グリット部分の自然石群部分の確認調査を実施した。

詰の中央部分C7グリットを中心に1TRを設定し、遺構の確認を実施したところ、ピット1基を検出し、トレンチを南のC8とC9の一部及びC6の一部からC5グリットまで拡大し全掘を実施した。その結果、南北に並ぶ4個のピットが検出された。

2TRは現在詰への登り口となっており、虎口等の遺構確認も含めて設定したトレンチである。地山層まで発掘したがF9グリットの隅部分に浅い小規模なピットを1個検出したのみであった。

3TRは第4調査区の石群との関連遺構の有無を確認するために設定したが、地山層まで全く何の遺構も存在しなかった。

4TRは詰周囲をとり巻く石垣（石積）の状況把握と、土壘の基盤か基壇の有無及び5TRとの関連遺構の把握を目的として設定調査した。

5TRは第4調査区の石群関連遺構及び台状地形裾部の状況把握のために設定したトレンチである。

これらのトレンチの調査にあたって各所に柱穴状のピットが確認されたため、さらにそれらの遺構の範囲や性格を把握するために第1調査区、第2調査区、第3調査区の3調査区を設定し調査を拡大した。地表面に散在する雜木林や雑草、腐葉土を除去したところ、第II層の灰黄褐色土層中に多くのピット群が検出できた。調査はこれらのピット群の調査を中心にするため。

また詰を中心とする現状地形の実測も併行して実施した。詰平坦部の平面実測と、周辺地形、詰南端部の台状地形、及び南北両嶺に所在する堀切部分詰西地下方の4条の堀切部分等の実測によって、これら城の構と詰との関連を把握しようとした。

詰の実測総面積は761m²（230坪）であり、内発掘総面積は541.8m²であった。

IV 調査の概要

1 検出遺構

(1) 第1調査区（C4・B4）の自然石群

C4グリットを中心として散在する自然石群である。腐植土上に一部露出したものもあり、最大のもので1m×60cm、小さいものは15cm×15cm程度とまちまちの大きさである。すべて砂岩の割石である。1m×60cm、50cm×30cm、50cm×35cm、20cm×40cm、40cm×60cmなどについては、礎石として十分な大きさであり、適當な平坦面を有する石ではあるが、平坦面が著しく傾斜したもの、土中に埋ったもの、反転したものなどがあり、また検出間隔についても規格性はなく、これらの礎石上に建造物をのせることは検出状況からみでは不可能である。ただ石の形や大きさまた検出された位置等から考慮すれば一時期礎石として使用された可能性は考えなければならないものであろう。近世の耕作による移動も考えられるものであり、人力での移動の困難な大石がそこに残存することも考慮しなければなるまい。

(2) 第4調査区の石群

C11グリット内に散在する石群である。一部腐植土上に露呈した石も存在したが、そのほとんどが腐植土層中に埋まり、第II層の灰黄褐色土上にのっている。すべて砂岩の割石で詰部分の各所に使用されているものと同質のものである。一部南接する台状地形裾部の法面部分に乗ったものもあるが、その大部分は平坦なC11グリット内に集中する。その形状や規模からして建造物の礎石としての利用はやや困難であり、建造物をのせる規格性は全くない。この周辺から出土する遺物には近世・近代のものもあり、かつて存在したと伝承される小祠に関連をもつた石群か、あるいは詰平坦部のなかでは現状地形が最も高いレベルを示すところでもあり、南接する台状地形の法面、あるいは裾部に配されていた石積が崩壊し散在したものかも知れない、現状からその性格を明確にすることはできない。

(3) 5TRの石群

南接する台状地形の西北裾部A11、B11グリットの南部分に所在する石群で、少量が台状地形の法面傾斜部分に乗っている他はすべて第II層の灰黄褐色土中に埋まり、第III層の明黄褐色土及び第IV層の黄褐色地山層の上面にのった一層の石群で、他所と同様すべての砂岩の割石である。検出面積は4.5m²程度であり、台状地形に接近するにつれてその法面に沿うように上方に傾斜しているところを考慮すれば、台状地形形成のための基礎石とも考えにくく、むしろ台地状地形の法面崩壊防止の配石遺構と考えるのが妥当のようである。

(4) 周囲にめぐる石積（石垣）

詰平坦部周囲は延長約125mであるが、南の台地状地形裾部分を除いてその塊部のほぼ全域に石

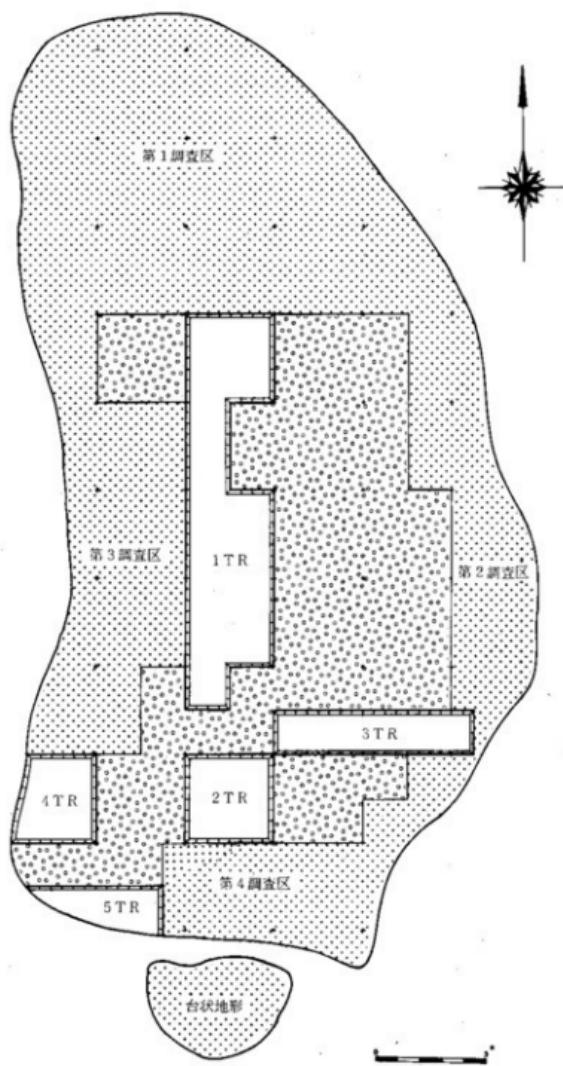
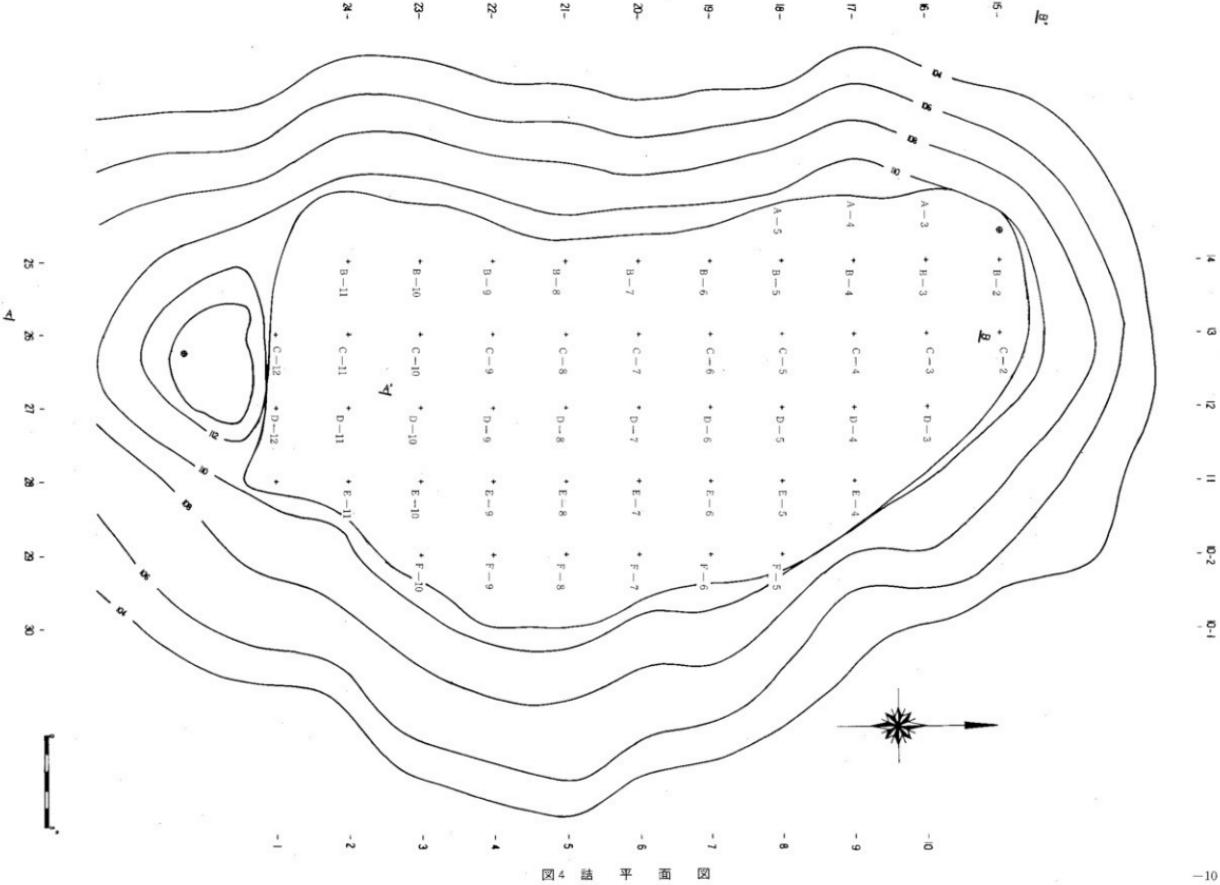


図3 調査区全図



垣や石列を築造し、より広く平坦面を確保している。この石垣や石列は1段で高さも10cm~15cm程度のところもあれば、十数段の1m前後のところもある。大きさも拳大のものから70cm~80cm大まで多種多様ではあるが、岩質はすべて詰部分各所に点在しあるいは配石されたものと同質の砂岩の割石ばかりである。

4 TR部分

このトレーニングは石積状況の把握と、南に接する台状地形の延長及び裾部分に配合された石群の有無及び土壘の存否確認の目的をもって設定したものである。

調査の結果は、南の台状地形の法面に確認された石積みなどの延長が認められる遺構はなく、また土壘の存在を裏付けるような基盤や基壇その他の遺構などは全く確認することができなかつた。ただ2.5m間隔の小規模なピットが2個検出されたがその性格の把握は不可能であった。

詰平坦部周囲をめぐる石列のこのトレーニング内での検出状況は、1~3段積みであり、石の大きさもまちまちである。石列強化を目的として使用される裏ゴメの栗石も全くなく、長方形の石を利用し、その短軸面を外側として、長軸を内側に長く配してその背面や上部は土で固定している。特に石材を加土した痕跡も認められず、周辺に散在する砂岩を集め無造作な構築法である。

この石列の外側は1m区間の帯状平坦面を犬走り状に残して下方に傾斜している。

A 5 グリット部分

この部分においても顕著な石積みを確認した。4TR部分同様石積みの外側は50cm~1mの帯状の犬走り状平坦面を残して下方へ傾斜しており、石積みは自然地形の凹凸を成形するように場所によって1段のところもあれば数段の構築部分もある。ただ外側の犬走り状地形部分は比較的同レベルを保ってこの石積の外側に沿っている。

4TR部分に比して使用された石も大きく、特に最下部など40cm~50cmの大石が配され、高さも最高所で46cmを測ることができる。高さを配慮した石の選択がなされたものであろう。使用された石には特別の加工痕など認められないのは4TR同様で、石質もまた同じである。

F 5 グリット部分

詰周囲の石垣中最大の石材が使用された部分である。その区間は2m程度と狭いものではあるが高さは65cmを測り、詰部分では最もレベルの低い地点でもあり、詰中央部分からはかなりの傾斜角をもって降った地点である。自然地形もかなり下った部分であり成形にあたっても大石を配することによりこの部分の一層の強化が必要であった個所かも知れない。

なおこのF5グリット部分においては石垣の外側に4TRやA5グリット部分において確認されたような犬走り状の地形ではなく石垣直下から急傾斜の山肌となっている。ただ下方3m部分にやや平坦な狭い帯状の犬走り状地形が、詰南下方から詰の東斜面に沿ってとり巻くようにこのF5グリット部分までのびていることと関連があるのであろうか。

E10, E11グリット部分

詰の東南隅の部分で、現在詰への入口周辺である。この部分にも顕著な石垣がみられる。グリットF10部分からE11部分までほぼ10mの半円状の石垣であり、最も高い部分が90cmで

ある。ただしこの部分は他に比べ小さい石を配しており一見緻密な構築ぶりである。崩れた部分やその可能性を考えさせる部分は全くなく整然と積まれ強固な姿をそのままとめている。この石垣の直下は現在詰への登り道が幅50cmほど設けられているが、本来この道はなく直接下方の狭い帯状地形と接続しており西斜面の如き犬走り状の狭い平坦部は存在しない。

詰をめぐるこれらの石垣や石列は、その高低がさまざまである。自然の起伏に富んだ尾根状地形の頂部を削平し平坦面を造出したであろう。そこには削平量を最少限にし、平坦部面積は最大に確保しようとする築城者の配慮がうかがえる。またすべての石に特別な加工痕など認められず、現在でも詰北西下方の堀切部分に露出した岩盤と同質の石材がそのまま使用されている。恐らく周辺で調達した岩石がそのまま利用された山城の詰構築の一普譜とみるべきであろう。一見無造作な作りであるが意外に強固に残存する。決して専門の石工の構築とは考えられないが応急の構築とも考えがたい。

(5) 柱穴状ピット群

本調査によって発掘されたピットの総数は67個である。平面プランはほとんどが円形であるが大きさ、深さはまちまちである。これらのピット群は特に詰北端部の第1調査区に集中し、また詰の周囲に並列して検出されている。

第1調査区の柱穴状ピット

第1調査区において発掘されたピットの総数は29個であり、平坦部にみられる19個と、周辺部に並列する10個のピット群に区分することができる。

平坦面に発掘された19個のピットについては、B 2、C 2グリッド内にほぼ等間隔に東西に並ぶ6個のピットを基準としてここに建造物を配置することを考えねばならない。しかしこれらのピットについてはその間隔においては許容できても、その深さにおいては極端な相違がみられることや、平行方向の柱穴ピットの検出がやや不正確であることなどからすれば検出状態のみでは整然とした東西棟の建造物を配置することは不可能であるが、東西6個のピットはすべてがたく一応5間×?間の東西棟の建造物の存在を考えることとしたい。

周辺部に並列する10個のピット群については次項で述べることとする。

周辺部に並列するピット群

詰の北西部から北・東へと総延長55mにわたって並ぶピット群である。これらのピット群のうちP 1からP 10までは径20cm~30cmとほとんど平均した大きさであり、深さは浅いもので30cm前後、深いものは75cmをはかるものまで、その間隔は1.5m~5.0mまでである。

P 11~P 26までのピットについては、径15~30cmとばらつき、深さも10cm前後のものから68cmほどのものまである。間隔は1.5m前後から3m程度であり比較的良好な間隔を保持している。

これらのピットについては、その大部分は円形プランであるが、なかには不整形のものも若干あり、さらに雑木の根によってピットの壁面が著しく破壊されているもの、あるいはピットの底

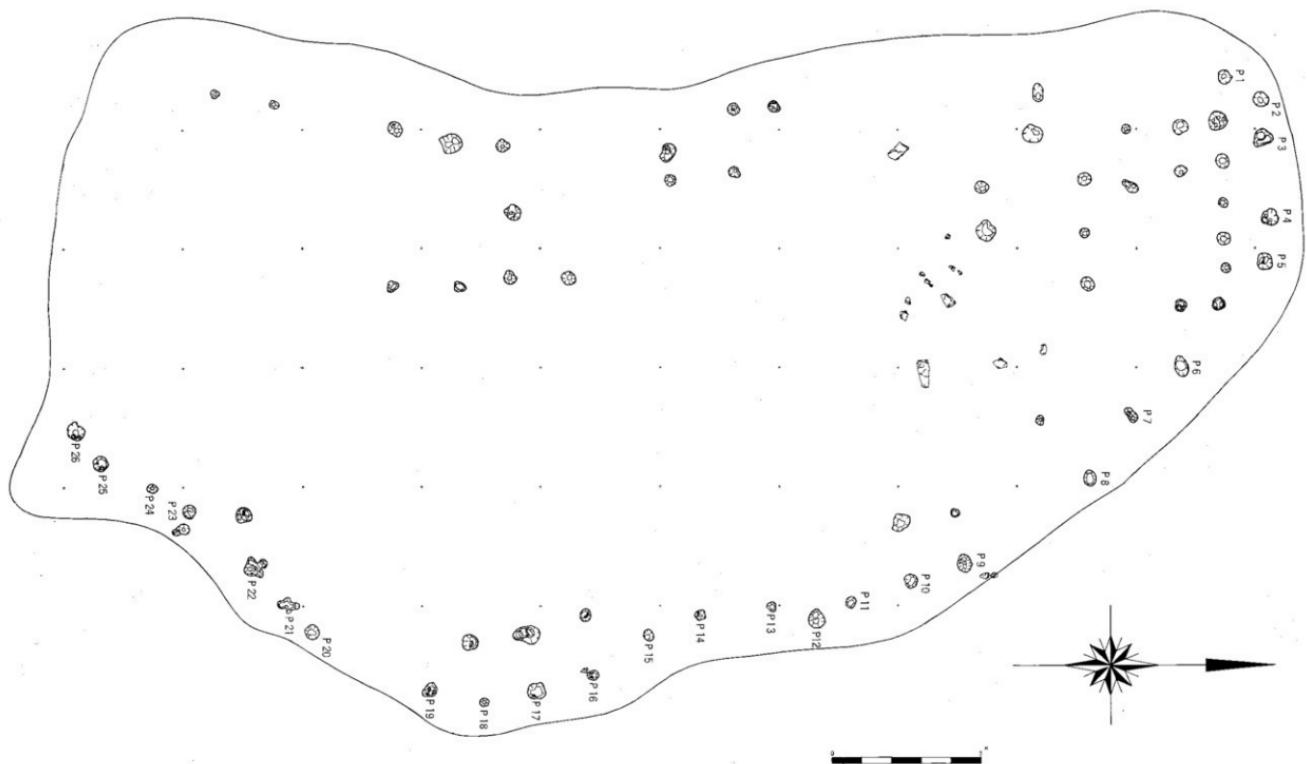


圖 9 洪洞縣遺址

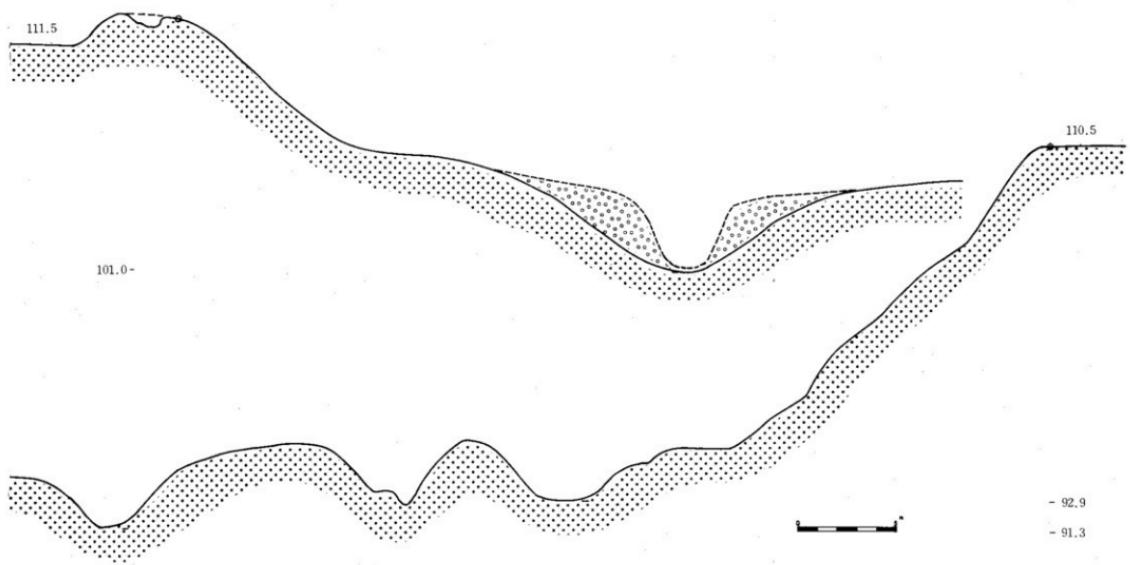


図 6 堤切周辺断面図

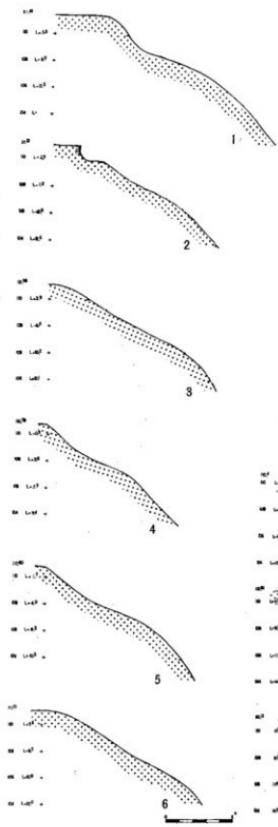


図7 話周辺地形断面図 1

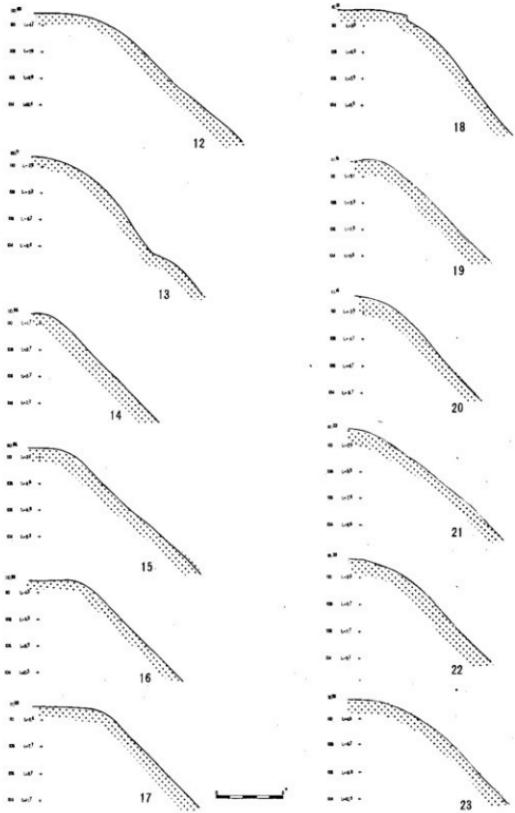


図7 話周辺地形断面図 2

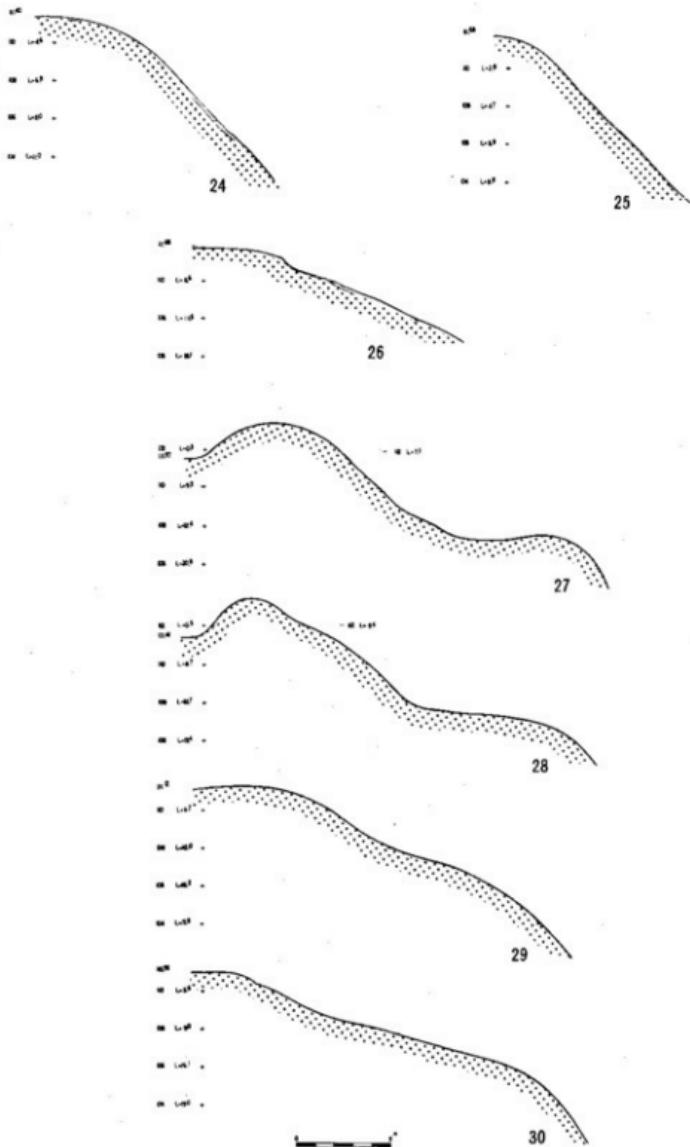


図 7 試周辺地形断面図 3

部が極端に小さく、かつかなりの深さにまで及ぶものもあれば、15cm前後の深さしか発掘できないものなど全くまちまちであり、検出状況のみから考慮すれば、これらのものに果して構造物を配することが可能か否か疑わしいものさえ存在する。しかし近代の耕地化及び作物の栽培を考慮すればかなりの擾乱や整地がなされたことも党活しなければならないことであろう。

これらのピットは、詰の平坦面地形の変化に沿って配されており、かつこのピットの外側に1m前後の余裕をもって先述の石垣が築かれ、さらに部分によってはその外側にも若干の余裕地を配した地点もあったことは先に述べたとおりである。石垣の外に余裕地を配した詰の西部分には並列するピット群はなく、むしろ石垣直下から急傾斜となる部分にピット群が並列しており、かつ石垣の内側に余裕地を残しているものも何かの意味を考えねばならない構えかも知れない。犬走り的な余裕地を残して詰を囲む柵列の遺構とすべきであろうか。

これらの他、第3調査区、4TR部分、ITR部分などにも小規模なピットを発掘したが一部には等間隔に並ぶものも存在するが、配列や規模も含めて規格性に乏しく、検出状況からのみではその性格を明確にすることは不可能である。

2 詰周辺部の現況遺構

(1) 詰南端部の台状地形

詰南端をほぼ直線的に東西に画する台状地形が存在する。詰との比高は1.5mでその頂部には15mほどの平坦部がある。台状に切られた詰側の法部分はほぼ垂直にきりたてられ、ところどころに地山の黄褐色土がそのまま露出している。西端部6m範囲にはその裾部分に石群が存在する。この石群が法面に突かれたものか、その裾部分に配されたものかの判定は現状では困難であることは前述の通りである。

頂部平坦面は、近代の堀削によって一部破壊された部分もあるが、詰側6mを径として南へ半円を描いた形となり、ここから南へは40度の傾斜角をもって降り、郭状平坦部を経て南堀切部分に至っている。

現状地形では、土壘状地形の残丘の如き形態は呈しているが、その詰側の法部分の成形状態から判断すれば、明らかに削られたものであり、自然地形の尾根部分を削平して詰平坦部を成形した残丘を南端部に残したものであろう。

(2) 堀 切

詰の南下方に1条と北西部の4条の堀切りの実測を行った。

南堀切は詰南端よりほぼ30mの南に所在する。詰南端部の台状地形の南斜面裾部分から、詰との比高5mをもって約15mほど南にのびる郭状平坦面が堀切られており南嶺に通ずる陸橋状地形が堀切られていることとなる。良好な遺構で頗著に残存する中央部分の計測値は、上幅5m、底幅2m、深さ3.5mで詰と堀深部のレベル差は10.5mである。

詰の北西部の4条の堀切は、詰とのレベル差がそれぞれ15m、18m、18m(一部18.7m)、19.3m

である。詰から堀切への傾斜は詰と5mレベル区間が最も急峻で60度、それより以降の第1堀切までが約40度の傾斜である。第1堀切は急傾斜の土砂の流入等によりほとんどが埋り、わずかな窪地として把握できるのみである。第2堀切は第1堀切との間隔6.5mで上幅9m、底幅3m、深さ2.5mである。第3堀切と第2堀切の間隔は8mで、その間は蒲鉾状の畠型となり、両堀切底部とのレベル差は3mで、敷は6mである。堀上幅は7.5mで、底幅は2mで2段となり、1m区間は深さ2.5mで他はそれより70cm深く3.2mを測る。第4堀切と第3堀切区間は15mあり、上面はやや平坦な畠型を呈し、敷は11mで第4堀切底部とのレベル差は4.3mである。第4堀切は上幅7.0m、底幅1.5m、深さ2.5mである。ここから傾斜はゆるく後方の吉良峯山頂へと続いている。

3 出土遺物

出土遺物は土師質土器片が最も多く、他に少量の青磁・白磁・染付・備前等である。これらの遺物はすべて細片であり復原可能なものはない。しかしながら口縁部・底部・文様等から器形、年代を抑えることにつとめた。

(1) 土師質土器

杯

合計400片余り出土したが、口縁部の形状が明確に残っているものはない。すべてが系切り底で、内外にロクロ目を残している。比較的残りのよい底部を観察すると直径4～5cmぐらいのものがほとんどであり、底部から類推するにはほとんど同一の法量・型態を有するものと考えられる。これらの土器胎土は赤色粒子を含み、砂粒をほとんど含まないという共通した特徴をもっている。また色調は淡茶色に発色する。このように製作技法・法量・型態・胎土に共通した特徴を有しており、土師質土器製作の画一化がみられる。

土鍋(図版-11)

口縁部の細片が1点出土している。強く張り出した肩部から外反する口縁部を有し、端部はやや肥厚して内傾する面をなす。内外面ヨコ方向のナデ調整を施す。胴部以下は不明であるが外面に叩目を有するものであろう。胎土には細粒を含み、焼成堅緻で淡茶色に発色する。表面採集資料である。

(2) 青磁(図版-13、22)

7点出土しているが図示可能なものは2点である。皿が1点で他はすべて碗である。13は内湾して立ち上る小ぶりの皿である。胎土はやや粗く釉は淡灰色に発色する。注意すべきこととしてこの皿の口縁部の一角所に焼成前につけられた切り込みがある。22は外面に雷文帯を有する碗である。雷文はヘラで描かれやや退化している。胎土は灰白色でやや粗く釉は淡青緑色に発色する。今一つ図示できなかったものの中に細蓮弁を有する碗の細片が出土している。すべて包含層と表

面採集である。

(3) 白 磁

ピットから3点、包含層より28点の計31点の出土を見た。すべてが細片であるが、楕が1点他はすべて皿であろう。後者は口縁部及び底部の形態からいくつかに分類することができる。図示したうち17が柵列ピット出土であり、他はすべて包含層出土である。

楕 (図版-20)

小型の楕であり下胴部がややふくらんで立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反する。胎土は白色で堅緻、釉は透明度のある白色を呈する。

皿

① 口縁外反のタイプ (図版-2・3・4・5)

胎土は2が白色堅緻で他はやや粗く灰白色を呈する。釉は2が白色、5が淡灰色、他はやや黄味を帯びた白色である。

② 口縁内湾のタイプ (図版-1)

白色堅緻の胎土で釉も白く発色する。

③ 「型」起しによる菊花皿 (図版-6・7)

6は直線的に立ち上がり、器壁がうすい。胎土は白色堅緻で、釉調は透明度の強い白色を呈する。7は灰色堅緻な胎土で釉も灰色に発色する。貫入がみられる。

底部 (図版-15・17・18・19)

15は高台及び外底は露胎・高台脇から胴部に向って2条の凹線が彫り込まれている。胎土は白色堅緻、釉は白色でやや厚くかかっている。17は断面三角形の高台を有し疊付け以外の全面に施釉している。胎土はやや粗く釉は白色に発色する。18は断面台形の削り出し高台を有し胴部内外面のみに施釉、胎土は乳白色堅緻で釉は白色で薄くかかり貫入がみられる。19は大型の皿底部で削付部分がせまく外面の釉を削り取っている。胎土は白色で堅緻釉調は白色を呈する。

(4) 青白磁 (図版-8)

丸ノミ状工具で彫り込まれた菊花皿で、胎土は白色で粗く釉は透明度のある胎色を呈する。貫入がある。表採資料である。

(5) 染 付

周辺の柵列状ピット及び包含層より計40点が出土している。

皿

① 蓋窓底のタイプ (図版-9・12)

3は内面二重の界線・外面に波頭文を有する。胎土は白色でやや粗く、淡藍色の呉須を使う。12は見込に一重の界線を有し、外面下半露胎で赤味を帯びている。胎土は乳白色でやや粗く呉須

は濁藍色である。釉は白色で貫入が入る。包含層出土である。

(2) 高台を有するタイプ (図版-16)

断面台形状のやや高い高台を有するもので、口縁内面に一重、見込みに一重の界線を有す。外面は上下に界線があり、その間に渦巻き唐草文を配する。釉は墨付の一部まで施され、高台内面、外底は露胎、見込は釉を削り取っている。胎土は灰白色堅緻で呉須は薄藍色、釉は灰白色に発色する。この皿は出土例を多く見ないが、中村城跡より類似品が出土している。

楕 (図版-10)

包含層より7点が出土しているが、図示できたものは1点のみである。10は外面に丹字文、内面に二重の界線を有する。胎土は白色堅緻、呉須は薄い藍色に発色する。他に綾杉文を有する細片が出土している。

(6) 濑戸天目 (図版-21)

黒褐色の釉を帯び胎土は淡黄褐色を呈する。口縁部の形態などから16世紀第二四半期のものと考えられる。表採資料である。

(7) 備前 (図版-14)

擂鉢の口縁部細片である。外面に重ね焼きによる色調の変化が見られる。表採資料である。備前は他に壺・壺の破片が5点出土している。

出土遺物一覧表

種類	量(片)	%
土師質土器	402	82.2%
青磁	9	1.8%
白磁	31	6.3%
染付	40	8.2%
備前	6	1.2%
瀬戸天目	1	0.2%
合計	489	99.9%

V ま と め

吉良城跡の築成年代・築城者を明確にする資料はない。城主吉良氏については、源希義にはじまるときれり、「吉良物語」によれば、吉良駿河守に至るまで13代あるいは15代まで存続したともされている。鎌倉期においては、吾川郡に所領を与えられ地頭として君臨し、南北朝から室町期を通じて台頭し、本山、安喜、大平、山田、津野、長宗我部らとならぶ七守護人まで成長する。その出自や成長の過程及び城主の変遷については『春野町史』に詳細は譲ることとしたい。

城についての記載が最も期待される『長宗我部地検帳』には、城は明示されず、

御土居屋敷三且懸テ	同
一、 三反式代 上屋敷	御土居
御土居外門ノ西脇ホリタオシ	同 谷木左衛門給
一、 三代四分勾 下畠	散 田

など土居屋敷とその周辺が示されるのみであり、かつ記載はあっても「堀タオシ」など次第に崩壊していく吉良城のみが浮彫りにされている。

『長宗我部地検帳』においては、むしろ本城の西方に所在する「西の城」についての記載が詳細であり、本丸を囲んで二ノ旦5、三ノ旦6、四ノ旦1などの規模が記されている。従って『春野町史』でも「弘岡村の国人吉良氏の拠点を西ノ城」として、吉良氏は堂々ここに在城する。吉良氏の古城は「西ノ城」とは別に東方に吉良峰城がある。吉良氏盛時には二つの城があったことになる。国人のA級として七守護に入れられるのも自然であろうか」とし、さらに「地検帳に城が明示されていないのは津野氏も同様である。地検帳に城が示されなかった理由は、長宗我部氏が特別待遇を与えたからであろうか」としている。吉良城と西の城との関連や、本城・出城・支城の関連なども含め、地検帳に明示されない城についても今後研究の余地のあるところであろう。

『高知県吾川郡弘岡上ノ村誌』(明治15年3月16日刊)によれば「元標ノ長ニ在リ之ヲ城山ト称ス、山椒平坦最モ廣キ所東西拾間、南北拾間訣所庭石ノ類猶在セリ其北側ニ磐堀アリ」とし、諸を東西10間、南北10間の計測値を示し、「庭石の類猶在セリ」と庭石(礎石?)の存在や、北の堀切の所在も明示している。

『土佐国古城略史』では「明治27年4月陪遊して吉良城に路る。北は荒倉の嶮を負ひ、南弘岡の沃野を控へ、當時之を名城と称す。高嶺南北に並峙す。其間一の虚濠を穿てり、南嶺に古墳及び小龕あり、駿河守を祀れるか。北嶺は南嶺より高く且つ弘し、面積二百八十六坪許りあり、堀址少許存す。其の他観るべき者なし」とし、その景観を南北兩嶺間の堀切りと詰の面積及び「堀址少許存す」と伝えている。

中世の山城についてはその城名や築城年代、廃棄の時期について文献上明確にすることは不可能である。本城についてもしかりである。

調査は詰部分を中心にその造構の確認調査を実施したものであるが、結果は掘立柱建造物跡と考えられる柱穴群と、詰の周囲を開むが如き堀（櫛）の杭穴であった。

第1調査区において確認された掘立柱跡からは5間×○間かの東西棟の建造物が想定できそうである。東西に並ぶ6箇の柱穴についても若干の危惧はあるが建造物と考えたい。梢円状の詰部分に建つ建造物では、棟方向はその長軸に対してほぼ直角に配されている事例は礎石をもつ久礼城跡の例もある。

またC4グリット周辺に散在する礎石状の石も看過することはできない。検出状況は散在し規格性はないにしてもその石の大きさや形状からすれば明らかに礎石として利用されたとしか考えることはできない。近代における畠地転用の整地の際の移動としなければならない。本県における中世山城の発掘調査例は少ないが、そのなかでも詰部分における建造物の遺構として、波川城や久礼城、中村城のように礎石を有するものと、栗本城のような掘立柱建物跡のみのものがある。吉良城においてもある時期には掘立柱の建造物があり、又時を変えて礎石をもつ建造物が建ち、あるいは双方併行したかその時期判定は不可能にしてもこれらの建造物の存在を考えてもあながち妥当性を欠いたものとは言いがたいではなかろうか。特に本県中世城跡の詰における建造物の位置について、過去の調査事例からしても詰の後方部分に建造物を構えるパターンの多いことはこの考えを一層強めさせるものである。

また、掘立柱建造物を有する城跡と、礎石櫛柱を有する城跡との性格の相異も今後追求しなければならない課題であろう。

次に詰の北西隅から北・東にかけて周る堀址状のビットについては、宮地森城もその著書の中で「堀址少許存す」と述べている。この堀址がいかなるものであったか詳細な報告がないので不明ではあるが、堀址を考える遺構の存在したことは事実であろう。今回の調査によって、この城には土塁の存在は認めがたい。土塁のかわりの攻防の構えとして堀か櫛かを考えてもよさそうである。特に堀址と考えられるビットが検出された下方の斜面については、北西隅部分は背後の吉良峰に通ずる地点であり、また東斜面には詰とのレベル差3mの下方に幅狭い犬走り状の平坦面が南からE3グリット下方までのびていること、一方西斜面は、現在でも登り難い急崖を呈する地形である。この東西両斜面の相違を考慮すれば、櫛か堀かが東に存在し、西には存在せざとするのも肯定できそうである。

またB6グリットや、C8グリットを中心とする地点で検出されたビットについても、現状からは建造物を想定することは不可能ではあるが、詰の中央部を避けた小規模な建造物の配置は、礎石を伴う久礼城などにおいても報告されている。吉良城においてもこの周辺の小規模な城兵駐屯の小建造物の存在を考えてもよさそうである。やはり近代の整地がわざわいしたものであろう。

詰南端部に残る台状地形は、烽台的な遺構ではなかろうか。詰の先端部に望楼的な建造物を配した城跡の事例は、久礼城や栗本城など報告されてはいるが、本城において望楼的な役割を果す位置はむしろ南嶺と考えたい。南嶺は詰より若干ではあるが高く、春野平野は眼下にみえ、遠く東には浦戸城、西は仁淀川を隔て新居城、蓮池城など一望の場所である。小規模な平坦面を有す

る台状地形は望楼とするより烽台とするのが妥当のようである。

詰部分の成形については、南端部台状地形の詰側法面に露出している黄褐色地山層からみれば相当量の地山が削られている。詰は自然地形を削り、低い場所には石垣まで築造して土砂を埋め相当な苦謹によって800m²平坦面が成形されたものである。

次に出土遺物についての若干の考察と吉良城の時代的な位置づけを考えてみる。出土遺物の大半は包含層出土でかり、細片で明確な時期決定は困難であるが、輸入陶磁器を中心にある程度の追求は可能である。

出土遺物のなかで最も古く位置づけられるものは雷文帯の青磁碗（22）で15世紀前半におくことができる。また土鍋（11）も15世紀におさめることができよう。輸入陶磁器のなかで最も出土量が多かったのは染付であり、皿・碗のほとんどが16世紀のものである。白磁についても同様のことがいえる。従って輸入陶磁器からすると15世紀のものが少量で大半は16世紀のものとすることができます。また碁笥底の皿（12）もピット内から出土しており、これらの遺物からすれば、検出遺構は一応16世紀のものと考えなければならないであろう。

春野地方における16世紀は文字通り戦国時代である。永正6（1509）年吉良平三尉は本山、山田らとともに長宗我部兼序を滅ぼし16世紀があける。永正から大永にかけて本山の南下が活発となり、天文9（1540）年に近い数年前には吉良氏も滅亡したものとみられる。天文～弘治～永禄と仁淀川一吾南平野をはさみ、西の一条と北の本山の対立抗争が展開される。永禄3（1560）には長浜戸の本の戦から長宗我部、本山の争霸戦は開始される。永禄5（1562）年には朝倉城攻防戦が両者によって展開され、この時期本山の吾南支配は終りをつげる。吾南は長宗我部（吉良）親貞にうつり、天正5（1577）年には親実にうけつかれる。しかしこの親実が元親の怒によれて自刃するのが天正16（1588）年である。翌天正17年より吾南地方の検地が開始され歴史は17世紀へと入る。詰において確認された遺構の多くは、おそらくこの転変激しい16世紀に生きた城兵たちの構築したものがその大部分と解すべきであろう。

次に出土遺物の器種構成をみると、全出土遺物のなかに占める輸入陶器は16.3%であり、15世紀後半とされる芳原城の1.7%に比しきわめて高率である。その差異は山城と平山城の性格の差、^(註1)また詰と堀の機能をもつ湿地という調査地区の相異はあるとしても、この差異は時代差に起因することは勿論、居城者の性格も考慮しなければならないであろう。

いまひとつ注目すべきは、最も出土量の多かった土師質土器についてである。吉良城出土の土師質土器は杯のみであり、製作技法、法量、形態、胎土を通して画一性が顕著である。芳原城においては杯・皿等があり、さらに各々が数種の形態にわかれるなど多種多様であるのに対し著しい変化である。この変化は土佐の15世紀後半と16世紀との土師質土器生産体制の変化に求められるのではないかろうか。「土佐戦国の守護7人や一条氏は、それぞれ土器屋をもっていた」と推考されるし、15世紀代小地域・局地的生産集団（たとえば神社等に支配されていた土器工人）^(註2)が中世後期の社会的激変のなかで、国人級豪族の支配下に再編成された結果とを考えることができるのではないかろうか。これについては今後多くの資料による検討も必要であるが、土師質土器の分析を

もとに、中世後期の手工業生産、さらには同期の社会構造の解明も可能となりそうである。

本県における中世城跡は653箇所の存在が昭和57年度の分布調査によって確認された。それらの大部分には城跡遺構と考えられるものは存在するが、明確に築城年代や城の構造・性格について述べができるものではなく、そのほとんどが伝承にたよっている。城跡はその土地では、地名やホノギ、伝承によって人々に親しまれているが、その保存への対応はきわめて遅れている。本県においては、岡豊城・朝倉城の二城が県指定であり、市町村においてもその指定は他の文化財に比して件数も少ない。そのため近年の開発によって消えていく城跡も多い。県内において何らかの形で調査された城跡は、波川城・古井の森城、安芸城、田村城館・岡豊城・栗本城・久礼城・芳原城・中村城・千屋城・和田林城・吉原城・大津城・高知城、それに今回の吉良城である。このうち久礼城と吉原城の小規模な調査を除いて他はすべて土木工事に伴う緊急調査であった。今回の吉良城はこれらの調査とは異り、保存管理の方策を把握するため、春野町教育委員会が主体となった調査であり、山城及び土居を含み、ある程度年次をおっての計画で本県における最初の試みでもありその意義は大きい。

註1 宅間一之・出原恵三『芳原城跡調査報告書』 高知県教育委員会 1984

2 岡本健児「神道考古学 土器（かわらけ）考一」『土佐史談』166号 1984

3 山本大・秋沢繁『土佐中世史の研究』 1967

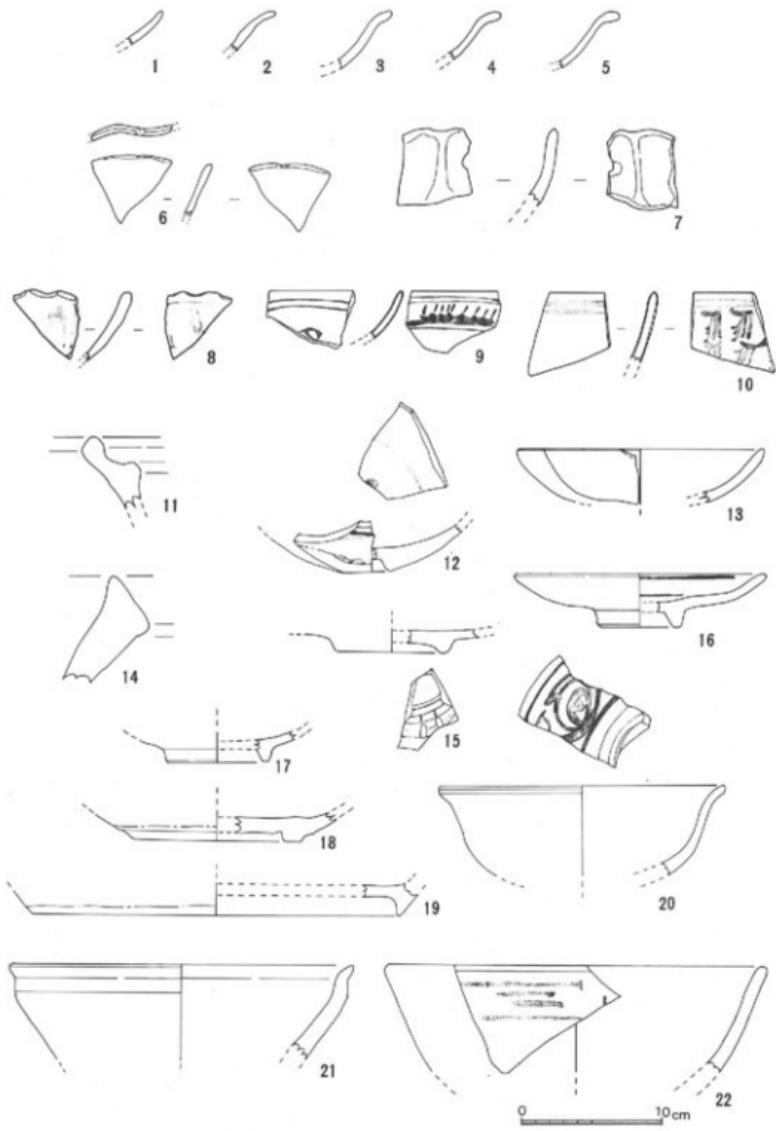


図8 遺物実測図

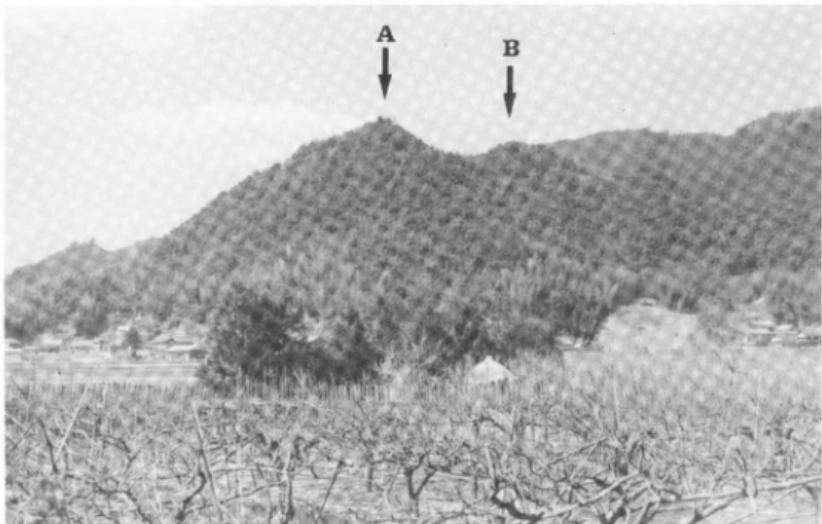
図 版



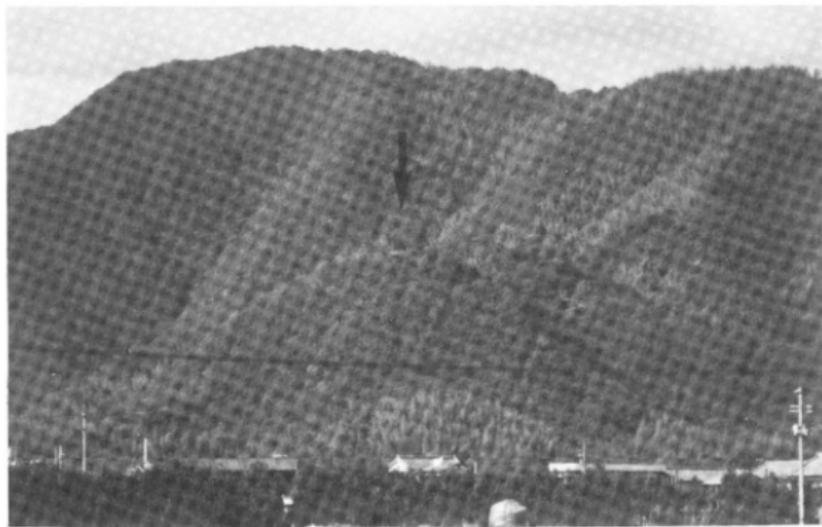
仁淀川より城跡を見る



仁淀川堤防上より城跡を見る (A北嶺、B南嶺)



御殿（南学発祥地）より城跡をみる（A南嶺、B北嶺）



森山より城跡をみる



南嶺よりみる春野平野



南嶺南端平坦部



詰・発掘前の状況



詰・発掘前の状況



詰・草刈り風景



詰・草刈り風景

P.L. 6



詰（北より）



詰（南より）



第1調査区 磁石状石群（北より）



第1調査区 磁石状石群（南より）



第4調査区 石群（北より）



第4調査区 5TR全景（北より）



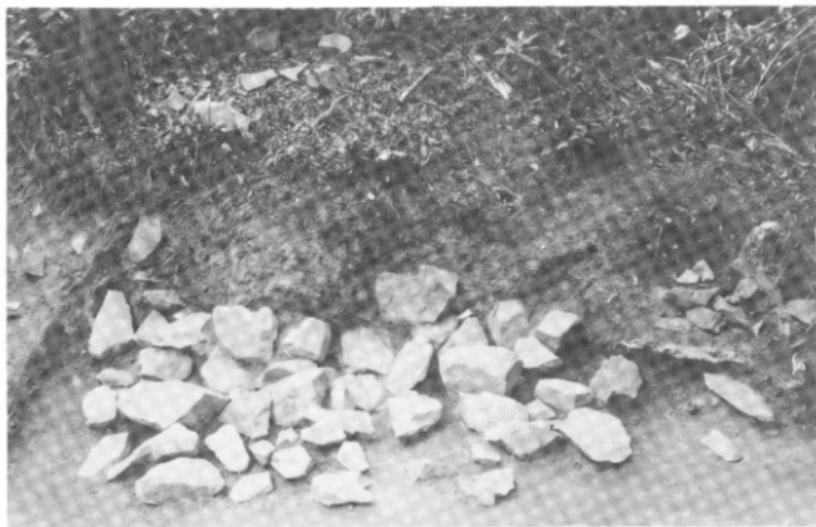
第4調査区 5 T R全景(東より)



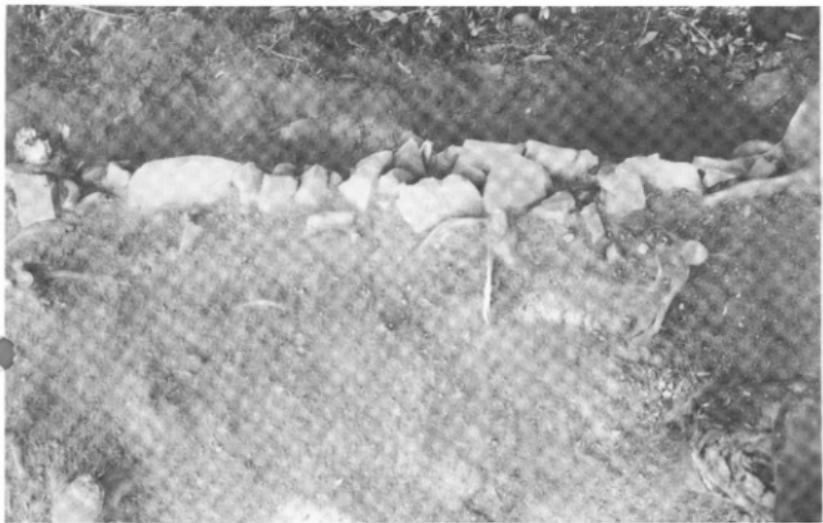
第4調査区 5 T R全景近景



5 T R 全景 (北より)



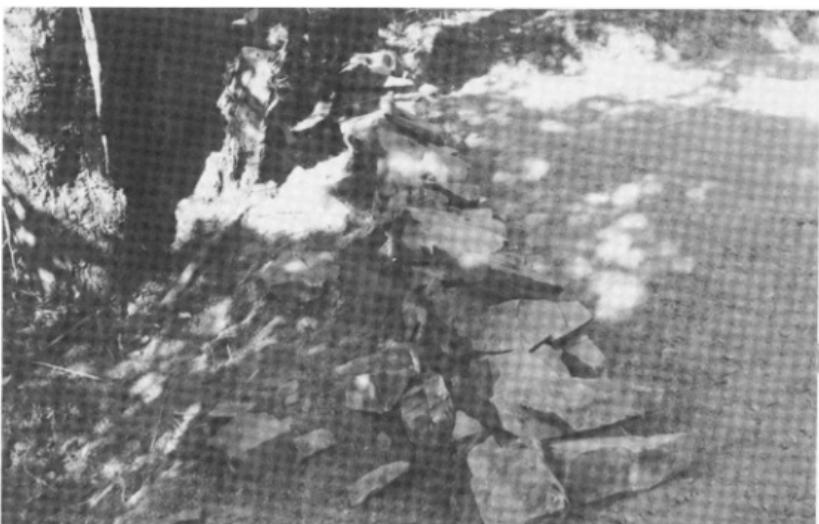
5 T R 近景 (北より)



4 T R 石積 (上面)



4 T R 石積 (詰側)



4 T R 石積 (南より)



4 T R 石積 (北より)



A 5 グリット石積 (南より)



A 5 グリット石積 (北より)



A 5 グリット石積上面



A 5 グリット石積状況



F 5 グリット石積



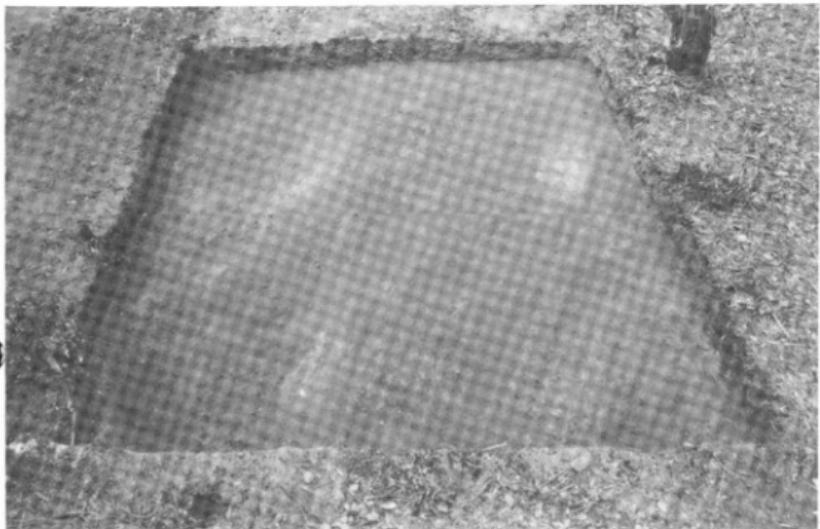
F 10、E 11 グリット石積



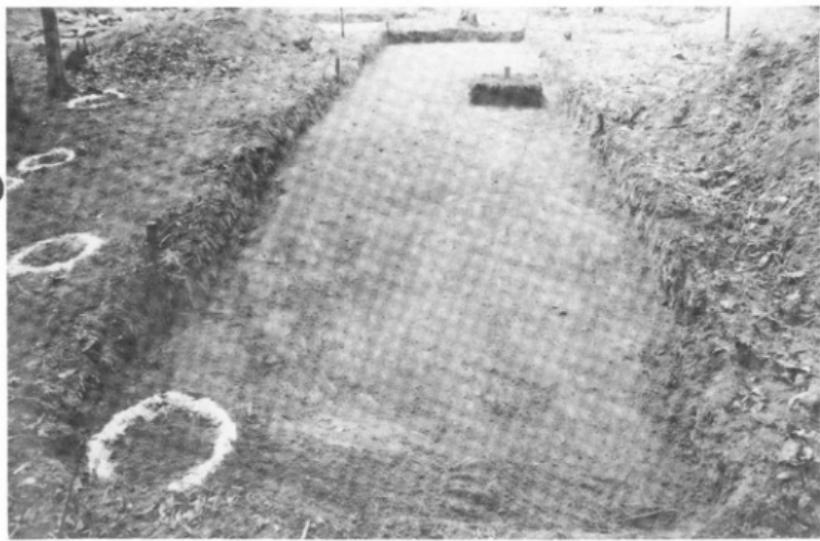
1 T R 全景 (北より)



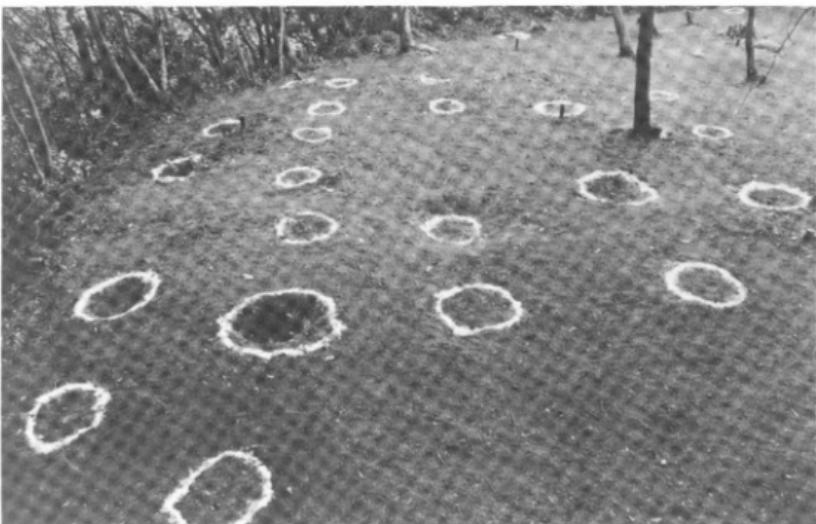
1 T R 全景 (南より)



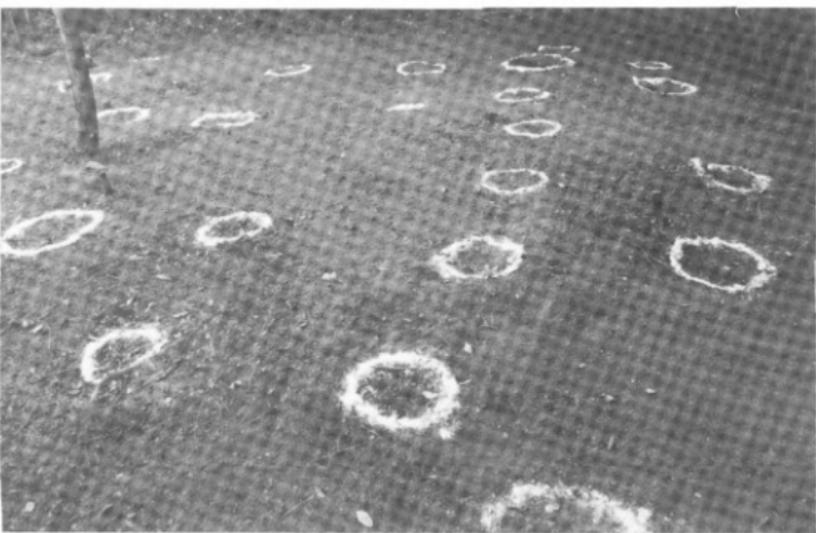
2 T R 全景 (北より)



3 T R 全景 (東より)



第1調査区 ピット検出状況（西より）



第1調査区 ピット検出状況（東より）